

# Eureka V

六年制通信 No.33

平成 30 年 2 月 9 日 (金) 号

## 暗記を怠るな

面白いアンケートを紹介しましょう。

- (1) 「役に立つ英語」と学校の英語教育の関係について
- (2) 現実的かつ最も望ましい英語教授法について

この 2 点について、英語学や英文学あるいは通訳の分野で超一流と言われている先生方に求めたアンケートです。少し抜粋してみましょう。

(1)については…、

「ヒアリングとスピーキングを強化すべき」

「いわゆる四技能を伸ばす必要がある」

「そもそも教師が役に立つ英語を身につけているかを反省すべき」

「役に立つ英語の基礎を教えるのが学校教育である」などの意見があります。

(2)については…、

「翻訳ではなく直読直解式がよい」

「最新の言語理論に基づき有能な教師が教えるしかない」

「ヒアリングとスピーキングを中心にした指導法が望ましい」

「会話や作文は従来の指導法では身につけにくい」などの意見です。

さて、これを読んで、君たちはどう思いましたか。それはそうだと思いますか。何をいまさら、当たり前じゃないかと思ったのでしょうか。

教育改革というのはいつの時代でも声高に叫ばれてきました。今もそうですね。その度にやり玉に挙げられるのが、いわゆる詰め込み教育です。丸暗記をさせすぎるとい批判ですね。英語においては、無味乾燥な文法の時間や例文の丸暗記に対する批判、あるいは単語テストに対する批判は何度も「悪」として登場します。でも、上のアンケートに応じた先生方も、君たちと同じ青春時代に（おそらく君たち以上に）ものすごい量の丸暗記をされてきたに違いないでしょう。先生方のお若い頃には、語学の時間は訳読が中心で、今とは比べ物にならない量の多読をさせられたはずです。もちろん英米への留学も経験されていますが、日本ではなかなか耳の訓練はできなかったでしょうから、現地へ行かれて英語が聞き取れないし話せないという苦い体験もされたと思います。そうすると、日本に帰って来て反省するのですね。自分が若い頃に受けた教育は「即戦力にはならない」つまり「役に立たない」ではないかと。ですから、先生方の多くはご自分のされてきた勉強法を若者に勧めることは少ないですね。おそらく、ご自分がお若い頃に相当な苦勞をされたからでしょうね。

ちなみに、先ほどのアンケートですが、これが載っている雑誌が発行されたのは昭和 35 年、今から 57 年も前のことです。面白いですね。前の東京オリンピックが昭和 39 年ですから、当時テレビなども各家庭に行きわたっていなかったはずで、CD はおろかカセットテープもなかったのですから、日本人が英語（だけでなく外国語全般）を聴く機会そのものが現在とは圧倒的に違います。アンケートの先生方は若き日にどれほどの苦勞をされたのでしょうか。

私の恩師はちょうどその世代の方ですから、先生の語学修行について直接お伺いする機会がありました。90 分を一コマとして週に 10 コマくらいあったかな、と言われていました。まあそれだけやれば何とかできるようになるよね、とも。絶対量が今とは全く違うのです。読む量、覚える量が全く違います。先生は暗記の大切さを強調していらっしやいました。今の私もそう思います。

これはもちろん語学に限りません。どの教科についても暗記することは重要です。覚えていない状態で「わからない」と言っているだけの人が案外多いのです。勉強の絶対量が足りないだけという場合はもっと多いでしょう。

暗記にかかる時間ももったいない、暗記すべき事柄は全てスマホに入っているのだから、現代人は百科辞典を身につけて歩いているようなものだ。だから暗記などに多くの時間を割かず、もっと創造的なことに取り組むべきだ。現代はこういう論調がありますね。しかし、これは絶対に間違いです。材料のないところに創造はありません。無から有は生まれません。何も覚えていない状態でリソースフルに能力を使おうというのは幻想だと思います。先日 NHK の「人体」を観ました。脳を解明するというので、又吉さんが実験台になっていましたね。山中教授の話も興味深かったし、記憶のメカニズムも、初めて見る映像で解き明かしていました。でもその中で、「創造は多くの記憶があって初めてできる」ということにも言及されていました。「ひらめき」のメカニズムの解明で、何も考えないようにボーっとしている状態にひらめきは起こりやすいことがわかっている。実はそういう状態の時に、一見つながらない記憶同士がつながるらしいのです。それが「ひらめき」の正体だということです。つまり、そもそも記憶の量が少なければひらめきは起こりにくく、創造は生まれないわけですね。今の君たちは、やがて来る「ひらめき」のために、うんと暗記すべき時期だと思います。

### 今週のおすすめ

ベディエ編 『トリスタン・イゾー物語』 (岩波文庫)

彼女が乗っているなら白い帆を上げてくれ、乗っていないなら黒い帆を。騎士は白い帆を願い巖頭に立つ。果たして帆の色は…。

このモチーフは、西洋の文学に多く見られますが、トリスタン・イゾーが一番有名ではないかな。ちなみにトリスタンは悲しみの人、イゾーはイゾルデのことで孤独な人をそれぞれ表します。媚薬によって引き寄せられた二人ということで、おとぎ話のような趣もあります。西洋に根づいた悲恋の物語です。ぜひご一読を。

BGM は八神純子の さよならの言葉 でした…。